タイトル

防災訓練

４００字詰め原稿用紙換算枚数：４０枚

氏名　Parade556

あらすじ

飯村小学校４年２組のベランダが舞台。放課後、防災訓練でほとんどの生徒がグラウンドに降りていく中、弟や妹のいる上級生はクラスまで迎えにいくことになっていた。ベランダで兄弟を待つ米村月（10）、飯田みのり（10）、曽田恵奈（10）。

取り留めのない会話をする３人。姉より兄が良いとか、迎えに来た恵奈の兄の話などをしている。

月とみのりの二人になった時、隣のクラスから親が弁護士のレミと仲間達が来る。レミは恵奈の悪口を言い、姉が迎えに来てみのりがいなくなった後は、月の父親が犯罪者だと悪口を言う。

月は、レミを突き飛ばすと、そこにレミの兄やその仲間達が。月は彼らに意地悪されるが、月の姉、優月がやってきて彼らを蹴散らす。そして月は優月から父親の過去を教えてもらい、二人はグラウンドに降りていく。

登場人物表

米村月（10）	飯村小学校　４年生	
飯田みのり（10）	月の同級生	
曽田恵奈（10）	月の同級生	
細田順平（10）	月の同級生	
寺田光汰（10）	月の同級生	
細田由依（12）	細田の姉（小４）	
寺田光平（11）	光汰の兄（小５）	
曽田恵介（12）	恵奈の兄（小６）	
大倉レミ（10）	隣のクラスの生徒	
木田鈴香（10）	隣のクラスの生徒	
白石萌（10）	隣のクラスの生徒	
大倉海人（12）	レミの兄（小６）	
木田幸太朗（12）	鈴香の兄（小６）	
白石庵（12）	萌の兄（小６）	
飯田このか（12）	みのりの姉（小６）	
米村優月（12）	月の姉（小６）	
川上舞花（12）	優月の同級生（小６）	
川上舞美（10）	舞花の妹（小４）	

舞台暗転。
飯村小学校４年２組の教室内。
校内放送「只今から、緊急避難訓練を開始します。下級生に兄弟のいる生徒は、必ず、教室まで迎えにいき、一緒にグラウンドへ避難してください」
甲高い警報音が鳴る。
警報音が止む。
４年２組担任の声「じゃあ、兄弟のいない生徒たち、校庭いくぞぉ」
子供たちの声「はーい」
たくさんの足音が遠ざかっていく。
舞台、明転。
ベランダの手すりにもたれかかって校庭を見ている米村月（10）飯田みのり（10）曽田恵奈（10）。

月「なんか、見捨てられた感満載」
みのり・恵那「それな」
月「迎えだるい。しかも姉だし」
みのり「それなー」
恵那「うらやま」
月「いやいやいや、兄一択っしょ。ね（みの
り見る）」
みのり「（校庭に向かって、笑顔で大きく手
を振る）やっほぉー」
月「あ、やっほぉー」
恵那「やっほぉー」

3人、ひとしきり手を振るとやめる。
途端に笑顔が消える。

月「てか、やっほーってなんだよ。山じゃね
ぇし」
みのり「それな」
恵那「義務感、ヤバい」
月・みのり「それな」

月「あー、しんど」
みのり「しんどいしんどい」
恵奈「姉、いいじゃん」
月「いやいや、そこもどんだ。マジ、幻想みすぎだから」
みのり「マジ、姉とかうんこと同列だから」
月「ゴキブリ以下」
恵那「いやいや、兄、きついっスよぉ」
月「お姫様扱いしてほしい」
恵那「ないない」
みのり「風邪引いたらお粥食べさせてほしい」
恵那「無理無理。ていうか、くせぇし」
みのり「それは姉が勝つ。絶対」
月「いつも臭い」
みのり「風呂上がりでさえ臭い」
恵那「それは言い過ぎ」
月・みのり「マジだから」
恵那「ハモんなぁ…にーいちはキツイ」
月「ぼっちだ」
みのり「ボッチ、ボッチぃ」

恵奈「うわぁ。最悪」
月「でもさ…あ、おーい（笑顔でグラウンドに向かって手を振る）」
みのり「やっほぉー」
恵那「やっほぉー」

3人、手を振るのをやめる。笑顔が消えて真顔になる。

月「まぁ。恵那のパパ、大学の先生だしね」
恵奈「出た出た」
みのり「末は博士か大臣かって」
月・恵奈「何、ソレ」
みのり「おばあちゃんが言ってた。頭の良い子の将来」
月「ググれよぉ」
恵奈「それな」
みのり「うわぁ。今度はウチかぁ」
月「ぼっち」
恵奈「ぼっちぃ」

みのり「死ね」
月「あ、死ねって言った。京子先生に言ってやろ」
恵奈「言ってやろ」
みのり「死ね。全員」
月「百叩きの刑だぞ」
みのり「マジ、教育委員会駆け込む」
恵那「なんもしないよ。アイツら」
月「さすが教授の娘」
みのり「教授の娘」
恵那「准教授」
月・みのり「何、ソレ？」
恵那「まだ教授じゃない人」
月「でも教授みたいなもんでしょ？」
みのり「ウチなんか、中小の係長だし」
月「ウチは…何やってんだ仕事」
恵奈「とりあえず教授じゃないんで」
月「なんか悩みのレベル高くね」
みのり「悩みの…あ、おーい（みのり、笑顔で手を振る）」

月「え？男子にもやる系？」
みのり「いちお、ね」

月、恵那を見る。
恵那、やらない。
みのり、手を振るのやめると真顔になり、

みのり「やんない系？」
恵那「やんない系…」
月「男子だし」

細田順平（10）、寺田光汰（10）教室の中に踊りながら駆けこんでくる。

細田「イェーイ。パーティータイム」
寺田「やっほぉ」
月「マジ死ねおまえら」
細田「うわ。月、息くせぇ（鼻を抑えてうずくまる）」

寺田「ぐわぁぁ（細田の真似する）」
月「テメェらは、アフリカゾウか」
恵奈「何ソレ？」
月「人間の５倍の嗅覚」
みのり「おばあちゃん？」
月「ウチ、おばあちゃんいないから。NHKプレミアムでやってた」
みのり「何それ？」
恵奈「サブスク？」
月「いやいや BS 、NHK」
みのり・恵那「しらなーい」
月「マジか…」
みのり「ぼっちぃ」
恵那「ぼっち」
月「マジかぁ」

細田と寺田、月たちに近づいてきて、

細田「お前ら、捨てられたんじゃね？」
寺田「くせぇから」

月「は？」
みのり「オマエらはどうなんだよ」
細田「俺は捨てられた」
寺田「マジで？」
細田「昨日、ねーちゃんのパンティー被って
　遊んでたから」
月・みのり・恵奈「さいあく」
寺田「かっけー」
細田「イエーイ。パーティータイム」
寺田「パーティータイム」
月「だから、なんなんだよ。ソレ」
みのり「相手すんな。腐る。目が」
月・恵奈「ソレな」
細田「月って、ブスなのによく生きてられん
　な」
月「殺す。マジで」
みのり「許す。殺せ、てか殺そ」
恵奈「あ、あそこに花瓶ある」
細田「うわぁ。こえー。京子先生に言うぞ」
月「言えねぇし」

細田「言うよ。ぜってぇ」
月「言えねぇよ。オマエ、今、死ぬし」
細田「やべぇ人殺しだ」
寺田「人殺しぃ」
月「殺して埋める」
恵那「バラバラにしてトイレに流そ」
月・もみのり「それな」
細田「おーい。ここに人殺しがいるぞぉ」
寺田「誰か助けてくれぇ」
月「死ね（細田を蹴る）」
細田「ぐわっ。いてぇ（大袈裟に倒れ込む）」
寺田「大丈夫か。細田」
細田「すまん…あとは頼む。がくっ」
寺田「細田。細田、細田ぁ」
細田「（勢い良く立ち上がると）イェーイ。
復活ぅ」
寺田「パーティーターイム」
細田「パーティーターイム」

細田と寺田、ベランダから走って教室

の中へ。

月「あぁ。マジうざい」

みのり「マジ、男子ザコ」

月・恵奈「それな」

教室の戸口に現れる細田由依（12）。

由依「おい。ゴミ」

細田「やべぇ。現れた」

由依「ランドセル持って待っとけって言ったろ」

細田「キレんな。ブス」

由依「女の子にブスって言う奴は、１００パー地獄行きだからな」

細田「バカ。このメスゴリラ。かかってこい」

由依「オマエ、マジくせぇから喋んな」

由依、教室の中にズカズカ入り、細田の机からランドセルをひったくる。

細田「勝手に触んなよブス」
由依「(何も言わず教室出ていく)」
細田「おい。おいって」

細田、由依を追いかけて出ていく。

月「すげぇ」
恵奈「由依先輩、相変わらず美人」
みのり「なんか、イオンでスカウトされたって」
恵奈「何回目よ。ソレ」
月「てか、なんであんなバカが弟？」
恵奈「血、つながってないんじゃね？」
月・みのり「それな」
みのり「でもさ、月は細田のこと好きっしょ？」
月「は？とち狂ってんのかテメェ」
恵那「ウチもそう思ってた系」
月「オマエら…マジ、死ね」
みのり・恵那「あー、京子先生に言ってやろ」

みのり「先生。月ちゃんがぁ…」
恵那「死ねって言いましたぁ」
みのり「（京子先生の声マネで）コラ、月ちゃん」
恵那「（京子先生の声マネで）お尻ぺんぺんよ」
月「（何も言わずグラウンドを見ている）」
みのり「うわ。地蔵になったコイツ」
恵那「お地蔵様」
寺田「お地蔵さまぁ」
月「てめぇは喋んな」
寺田「ブス。くせぇんだよ」
みのり「くせぇのオマエだよ。バーカ」
恵那「バーカ」

寺田光平（11）、教室に現れる。

光平「光汰」

3人、女子になる。

月・みのり・恵那「こんにちは」
光平「こんちは」
寺田「兄ちゃん」
光平「帰ろう」
寺田「うん」

寺田、ランドセルを持って光平と並んで出ていく。

月「なんか、アイツ乙女だった」
みのり「ソレ、思った」
恵奈「ウチも」
月「アイツ、よもやの…」
みのり「あるかも」
恵奈「でも、いいよね。多様性の時代だし」
月「いいと思う」
みのり「自由サイコー」
月「サイコー」恵奈「それな」
月・恵奈「え？」
月「今はサイコーでしょ」

恵奈「いやいや」
月「（みのりに）どっち？」
みのり「どっちでもいい」
恵那「あ。一個質問」
恵介の声「恵那」

曽田恵介（12）、教室に現れる。

月・みのり「こんにちは」
恵介「恵那。早く」
月「ほら」
みのり「恵那」
恵奈「まだ喋ってたじゃん」
恵介「恵奈」
月「恵奈」
みのり「恵奈」
恵那「…なんかヤダ」
恵介「（困った顔）」
月「恵那」
みのり「恵那。行きなって」

恵奈　「（首を横に振る）」
月「どうした？恵奈」
みのり「恵奈」
恵那「死にたい」
月・みのり「そこまで？」
恵奈「もっと話したいし」
月「明日でいいじゃん。ね」
みのり「そうそう。明日があるじゃん」
恵奈「明日、来ないかもしれないじゃん」
月「いや、明日は来るでしょ」
みのり「来る来る」
恵奈「保証できる？」
月「できるよ。ね？」
みのり「できるできる」
恵奈「神様？」
月「いや、人間」
みのり「それは人間。え、てかどうした？」
恵奈「なんか、今じゃなかったから」
月　「（恵介を見る）」
恵介「（目を逸らす）」

みのり「急に困ったちゃんかよ」
恵奈「…行くなら、一緒が良い」
月「ウチラも、あとから行くからさ」
みのり「行くから」
恵奈「…」
みのり「困ったな」
月「（恵介に向かって）わが姉、いました？
教室」
恵介「…あぁ、いたかも。喋ってた」
月「アイツ」
みのり「（恵介に向かって）わが姉って…わかんないですよね。隣のクラスだし」
恵介「たぶん喋ってた。声、聞こえたから。
笑ってる」
みのり「アイツ。マジ」
月「話すと止まんないんだ。わが姉」
みのり「同じく」
月「遅れると怒られるし」
みのり「そうそう」
恵奈「一緒に怒られたらいいじゃん」

月「君の兄が」
みのり「兄が」
恵那「（チラリと隣のクラスのベランダを見て）…行くね」

恵奈、足早に二人から離れていく。

月「あ」
みのり「恵那」
恵那「また明日ね。バイバイ」
月「恵奈」

恵那、二人から離れ、自分の席からランドセルとると、教室出ていく。
困った顔で出迎えた恵介の横に並ぶと、二人、並んで歩き出す。

月「なんかさ、展開の割に、距離近くなかった？」
みのり「それ思った」

月「アレなんだけど。ほしいの」
みのり「そ、あれだよね」
月「マジあの女」
みのり「マジ騙されたぁ」
月「明日、しばこ」
みのり「ウチの姉と交換してぇ」
月「いやいや、ウチの姉とでしょ」
みのり「無理無理。こっちだって」
月「ざけんな…って、不毛じゃね？コレ」
みのり「確かに」
月「（グラウンド見て）なんか、どんどん集まってんな」
みのり「こんないるんだウチの学校」
月「ウチら、いつ来んのかね？迎え」
みのり「なんか、ワンチャン置いてかれた気がする」
月「あー、それはキツイ」
みのり「家帰って言う？」
月「ママには言う」
みのり「あー、ウチ無理だわ。言うと姉に激

ギレするから。で、後で姉からしばかれる」
月「やっぱ姉外れじゃんね？」
みのり「（恵那の真似して）なんかヤダ…と
かやったらだ刺されるっしょ」
月「たぶん、八つ裂き」
みのり「八つ裂きはキツイ」

月とみのり、黙ってグラウンドを見る。
ざわつく校庭。

月「どっちが良い？」
みのり「は？」
月「寺田兄と恵那兄」
みのり「うーん、恵那兄」
月「何故に？」
みのり「顔」
月「でもさ、女子に優しくない系じゃん」
みのり「そんなの教育すりゃいいっしょ」
月「誰が？」
みのり「（自信満々に自分を指差す）」

月「マジか…」
みのり「うふ」
月「キモ」

ベランダ伝いに大倉レミ（10）、木田鈴香（10）、白石萌（10）が来る。

レミ「何がキモいの？」
月「あ、お疲れ」
みのり「お疲れ」
レミ「おつかれぇ。あれ、取り残された系？」
月・みのり「取り残された系」
レミ「あはは。だって」
鈴香「やばくね」
萌「やばいやばい」
月・みのり「はは」
レミ「あれ？あの子は？」
月「え？」
レミ「ほら、いつもいんじゃん。一緒に。誰だっけ？」

鈴香「あー、なんかあの足の形の悪い子」
萌「そうそう。こんな歩き方」
隣のクラスの３人「あはははは」
レミ「変だよね。あの子。ね（月とみのりを見る）」
月「…」
みのり「そうだよね。変かも」
レミ「でしょ。だよねぇ」
月「（みのりを見る）」
みのり「（月と目を合わせない）」
鈴香「なんか、目の形も変」
萌「変、変」
レミ「変だらけじゃん。ねぇ」
月「…」
みのり「そうだね」
レミ「（月）あれ、同意しない系？」
月「一応、友達だから」
みのり「（あ、となる）」
レミ「すげぇ、かっこ良い」
鈴香「かっこよ」

萌「こんな仲間ほしい」
レミ「ウチラじゃん。ねぇ」
鈴香・萌「ね」
レミ「今度、ウチのクルーザー乗せんだ。こいつら」
鈴香「クルーザー。初」
レミ「そりゃそうだろ。普通、持ってないし」
萌「親、弁護士、サイキョー」
レミ「パパ、普通の弁護士じゃないから。自分で事務所やってないと無理」
鈴香・萌「サイキョー」
レミ「二人のパパは、何してる系？」
月「…」
みのり「ウチは、会社員」
レミ「なんて会社」
みのり「たぶん、知らないよ」
レミ「知ってるよ」
みのり「ほんと」
レミ「知らないけど、パパに調べてもらうし」
みのり「良いよ」

レミ「悪いことしてたらすぐわかるから」
みのり「あはは」
レミ「学校とかいれなくなるし」
鈴香「レミのパパ、こえぇ」
萌「こえぇ」
レミ「お前らもだからな」
鈴香「助けてぇレミちゃん」
萌「レミ。レミ」
レミ「自転車屋なんか相手にしてる暇ねぇし。
　ウチのパパ」
鈴香「助かったぁ」
萌「文房具屋も許して」
レミ「てか、潰れないでよ。潰れたら、はず
　いから友達やめる」
鈴香「そんなぁ」
萌「親に言っとく」
レミ「マジ頼む。で、なんて会社」
みのり「あ、えーと…」
月「言わなくていいよ」
みのり「え」

レミ「あ」
鈴香「裁判だ」
萌「裁判だよ」

飯田このか（12）、教室の外に来る。

このか「みの」
みのり「姉」
レミ「なんだよ。姉って」
鈴香「ウケる」
萌「バカじゃね」
このか「早く来い」
みのり「うん。月、また明日ね」
月「…うん」

みのり、逃げるように教室の中へ。
ランドセルをとると、このかと並んで
歩いていく。

鈴香「何、アイツ」

萌「姉、だって」
レミ「ぼっちじゃん」
月「…」
レミ「ぼっち」

レミ、軽く月の足を蹴る。
月、顔をしかめる。
鈴香、萌も真似する。

月「痛いよ」
レミ「もっと痛くしてやろうか」
鈴香「してやろうか」
萌「ブス」
レミ「ブスじゃねぇし」
萌「ごめん」
レミ「ちょーブス」
鈴香「あはは」
萌「ちょーブス」

レミたち、月の足を蹴る。

月「（我慢する）」
レミ「オマエ、なんか生意気」
鈴香「生意気なんだよ」
萌「ちょーブス」
レミ「姉もブスだし」
鈴香・萌「ブス、ブス」
レミ「親父、何やってんの？オマエ」
月「…」
レミ「なんか、犯罪者らしいじゃん」
月「違う」
鈴香「うわ。キレたよ」
月「父さんは犯罪者じゃない」
レミ「でも捕まってんじゃん。警察」
月「若い頃だから」
鈴香「うわ。ほんとなんだ。こわ」
萌「こわ」

鈴香と萌、わざとらしく月から離れる。

レミ「ウチのパパ言ってた。犯罪者の子は、

犯罪者になるって」
月「…う」
鈴香「犯罪者」
萌「犯罪者」
レミ「何やったの？人殺し？」
鈴香「人殺しはヤバい」
萌「鬼畜じゃん」
レミ「難しいこと言ってんじゃねぇよオマエ」
萌「ごめん」
レミ「バカのくせに」
萌「ごめん。レミちゃん。ごめん」
レミ「いいけど。別に、もっと難しい言葉いっぱい知ってるし。オマエなんか全然届かないやつ」
萌「ごめん。ほんと、ごめん」
レミ「マジ、クルーザーとか無理」
萌「え？なんで」
レミ「なんで、じゃねぇよ。オマエのせいだろ」
萌「うん。ごめんって」

レミ「許すか許さないか決めるのこっちだから」
月「だから、止めなってそういうの」
レミ「…オマエ、なんなの。さっきから」
月「友達でしょ」
レミ「は？」
月「友達なんでしょ。萌ちゃん」
レミ「犯罪者は黙れ」
鈴香「…」
萌「…」
レミ「お前らも言え。言え」
鈴香「犯罪者」
萌「犯罪者」
レミ「人殺しの娘」
鈴香「人殺しの娘」
萌「人殺しの娘」
月「パパは、人殺しじゃない」

月、レミを突き飛ばす。
レミ、地面に倒れ込む。

鈴香・萌「あ」
レミ「オマエ、何すんだよ」

ベランダ伝いに、大倉海人（12）、木田幸太朗（12）、白石庵（12）が来る。

海人「レミ。大丈夫か」
レミ「お兄ちゃん。コイツに殴られた。足とか、いっぱい」
海人「マジなんなんだよオマエ」
月「あ」

月を取り囲む海人、幸太朗、庵。
レミ、海人の腰に組み付く。
鈴香と萌、少し離れたところで見ている。

海人「謝れ」
幸太朗「謝れ」
庵「謝れ」

月「（今にも泣きそうな顔）」
海人「謝れ」
幸太朗「謝れ」
庵「謝れ」
月「…」
海人「コイツ、やっちまおうぜ」
幸太朗「おし」
庵「じゃあ、俺が蹴り殺す」
幸太朗「すげぇ」
鈴香「お兄ちゃん」
レミ「オマエ、どっちの味方なんだよ」
海人「何、ソッチにつく感じ」
鈴香「違う。違うよ」
海人「じゃあ、オマエがまず蹴れ。ほら」
レミ「やれよ。やれ」

鈴香、月に近づき、蹴る。

月「いたっ」
海人「もっと強くやれ」

レミ「強く」

鈴香、月を強く蹴る。

月「いたいッ」

月、うずくまってしまう。

海人「おし。頭蹴れ」

幸太朗「俺やる。俺。サッカーボールきーっく」

教室の戸口に現れる米村優月（12）

優月「アタシも、まぜてぇ」

海人「あ」

優月、ベランダに出てくる。

幸太朗「うわ。変人だ」

庵「変人」
海人「なんだよオマエ。キモいんだよ」
優月「混ぜろよ。私も」
海人「オマエ、自分の妹蹴るのかよ」
優月「楽しけりゃやるよ。なんでも」

優月、海人にしがみついたレミを蹴る。

レミ「痛い。何すんだよ」
海人「てめぇ。殺すぞ」
優月「殺す？オマエ、人殺したことあんのか」
海人「ねぇよ。あるわけねぇだろ」
優月「ウチはあるんだけど」
レミ「お兄ちゃん。痛い。足」
海人「マジで、パパに言ってやるからな。お
まえらの一家、破滅させてやるよ」
レミ「痛いよぉ（レミ、泣き出す）」
優月「だっさ」
海人「大丈夫だから。パパに言うから」
優月「（レミの傍で）次は、刺すから」

海人「オマエ、脅迫だからな。ソレ」
優月「刺したら終わり」
海人「妹だぞ」
優月「妹なんだわ。ソイツも」

月の周りから、みんな離れていく。

優月「親が弁護士だろうが何だろうが関係ねぇし。刺す。コイツを。それにオマエも。それからオマエも、オマエも、オマエも、オマエも。全員」
海人「死刑だぞ」
優月「関係ねぇし」
海人「死刑だ。オマエ」
優月「どうせオマエ、死んでるし」
海人「う」
優月「消えろ。今すぐ刺すぞ」
海人「…行こうぜ。行くぞ」
幸太朗「お、おぉ」

月と優月を残して、全員ベランダから
逃げていく。
レミ、海人にしがみつくため、海人、
歩きにくい。

レミ「おにいちゃーん」
海人「歩きにくいって。マジで」

全員、教室を出ていく。
月、しゃがみ込んで泣いている。

優月「なっさけな」
月「…」
優月「刺せよ。オマエ」
月「やだよ。人殺しになりたくない。父さん
　みたいに」
優月「人は殺してないだろ」
月　「（顔をあげる）」
優月「ぶっさ」
月　「（優月を見上げる）」

優月「ただの暴走族だろ。喧嘩で捕まっただけ」
月「刺したの？」
優月「ケンカはステゴロ」
月「ステゴロ？」
優月「素手ってこと」
月「素手って」
優月「オマエ、もっと勉強しろ」
月「国語、学年１番だし」
優月「小４、レベルひくっ」
月「父さん、人殺しじゃない」
優月「たぶん…きっと」
月「父さん。どこいるの？」
優月「インド洋」
月「どこ？インド？」
優月「まぁ、そこらへん」
月「知らないじゃん。姉も」
優月「世の中ってな、広いんだ」
月「広いんだ」
優月「弁護士もいいな」

月「ウチ、破滅させられる？」
優月「そんなに暇じゃないだろ」
月「ほんとに？」
優月「クルーザーの維持費稼がないとだから」
月「維持費？」
優月「それも知らないんか？」
月「知らない」
優月「なさけな」
月「でもよかった」
優月「何が」
月「父さん、人殺しじゃなかった」
優月「いつからそんな話になったんだよ」
月「言われたから」
優月「あぁ…アイツか」
月「アイツ、嫌い」
優月「アイツも、オマエのこと嫌いみたいだな」
月「女子なのに、仲良くできない」
優月「女子だからできねぇんだって」
月「嫌い」

優月「兄貴は可愛いけどな」
月「マジ？」
優月「うん。刺すぞぉーって言うとすぐ泣く」
月「あはは」
優月「刺さないって。あんな弱虫」
月「パパに言うってすぐ」
優月「だから、そんな暇ないってパパさんも」
月「クルーザーの維持費」
優月「憶えたじゃん」

教室の入口に現れる川上舞花（12）と
川上舞美（10）

舞花「ゆづ」
優月「なんだよ」
舞花「キレてる。センコー」
優月「なんで」
舞花「アンタが遅いから」
優月「オマエもいんだろ。今」
舞花「だから、ダッシュ」

優月「良いよ。先行け」
舞花「友達やめんぞ」
優月「好きにしろ」
舞花「ハードボイルドすぎ」
優月「ウチらはウチらのペースで行く」
舞花「先行くよ。明日ね」
舞美「月ちゃん。明日ね」
月「（小さい声で）うん。明日」

舞花と舞美、走って去っていく。

優月「ぜってぇ、聞こえねぇから」
月「足、痛い」
優月「明日、蹴ってやれ」
月「刺す」
優月「いいね」
月「友達、バカにされた」
優月「刺すしかないな」
月「うん」
優月「立てるか」

月「うん（立ち上がる）」
グラウンドから教師の声「こらぁ、いつまで
いんだ。ゆづぅ」
優月「あぁ。うるせ…（教師に向かって）今、
行くよ」
グラウンドから教師の声「お前らだけだぞぉ」
優月「ランドセルは」
月「中」

月と優月、教室の中に入る。
月、ランドセルを背負う。

優月「今更だけど、なんで青？」
月「ランドセルは？」
優月「あ、教室」
月「どうすんの」
優月「いらねぇよ」
月「いるでしょ」
優月「いらね」
月「父さんは？」

優月「だからインド洋」
月「それ聞いた」
優月「半年くらいで帰ってくるだろ」
月「半年」
優月「今度の春くらい」
月「春。自分の子供の名前、春にしたい」
優月「それ、今、いらねぇ情報」

月と優月、教室を出ていく。

月「姉は、何にする？子供の名前」
優月「今はどうでもいい」
月「月はいれる系？」
優月「絶対にやだ」
月「あはは」
優月「笑うな」
月「優月」
優月「刺すぞ」

二人、教室を出ると走り出す。